
勇気と裕樹は違うモノなんです

めんとんぴん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇気と裕樹は違うモノなんです

【Nコード】

N7950Y

【作者名】

めんたんぴん

【あらすじ】

相変わらずの異世界モノです。

ただ主人公は自分の意志で呼ばれますが、バトルはあっさり風味になると思います。

貧乳は出てきてもサブです。おっぱいは正義なんです。

ありきたりのプロローグ（前書き）

えー昨日投稿したのが、作者ポカミスにより消失しました・・・。
またーから書き直しました・・・。
主人公が少し、てか大分変わったかも。

ありきたりのプロローグ

俺の名は北条裕樹。ホウジョウユウウキ

一介の高校生である。彼女は居ない・・・居た事も無いし予定も無い（涙）。

2年前の飛行機事故で、家族は全員失った。

今は、辛うじて親戚と呼べる程度の”ほぼ他人”の家に厄介になっ
ている。

両親の財産は、ほぼ全部、親戚と言いつ張るハイエナどもに食い散
らかされた。

今はその内の一匹（いや夫婦だから2匹か）に世話になってるつ
ーのが何ともな。

おまけに、

「食わせてやるんだから有り難く思え」
と来たもんだ。

嬉しくて涙が止まらないですよ。全くね。

家族と財産全てを失って、茫然自失状態からも覚めた俺は、こい
つら全員ブチ殺そうと思った時期もあった。

そんな俺を諫めてくれたのは、剣の師匠だった。

俺の実家の近所に住んでた爺さんんだけど、夕雲流せきじゆんりゅうって剣術の
継承者だったんだ。

俺はその爺さんに、ガキの頃から習ってたんだわ。

きっかけは何だったかなあ？忘れた。

あ、剣道じゃ無くて剣術ね。

剣道はスポーツ。剣術は実戦用。

大体さ、”決められた部位以外打つても無効”とかさ、実戦で言

つてられ無いっしょ？

そりゃ確かに、面のトコ斬られりゃ致命傷だけどさ、肩斬られても平気！な訳無いべさ。

試合にしてもそう。江戸時代は平和だったから、「試合」腕比べ」になっちゃったけど、本来は「死合」果し合い」なんだよね。

宮本武蔵が良い例。

まーそんなのはどーでも良いか。

取りあえず師匠に「生きてる事を感謝すべし」みたいな事言われて諭されて、復讐はやめた。

あいつらは汚い奴らだけど、家族の仇じゃ無いしね。

んでまあ、遺産盗った奴らに養われつつ、休日は爺さんトコ通って修行してたんだけど、こないだ爺さんも逝つつちまった。

形見にエライ業物遺してくれたけどさー。こんなの貰って良いのかよ、ホント。

「村正」

そう、あの村正。

妖刀つてのは都市伝説の類だけど、銘刀なのは事実。実際切れ味は凄まじい。

売れば何千万とかになるっぽい。真正ホンモなら、だけど。

俺は鑑定眼とか無いし。

村正の特徴には当て嵌まってるんだけどさ、写しコピーとかもあるしねえ。

まー売る気なんざさらさら無いし、切れ味抜群なんで問題無いしな。

ま、そんな訳で、師匠まで居なくなっちゃったから、今の俺には

味方って言える人は皆無。

なんとなく学校行って、帰って来たらゲームしてるだけ。最近素振りとかもサボってるなあ。

鈍ってきたなー、とか思いながらの下校。歩いて30分の距離だしな。

帰ってもハイエナ夫婦はどーせ留守だろーし、晩飯どーすっかなー？

なんか食って帰っても良いんだけど、一応育ち盛りなわけで、またすぐ腹減るんだよなー。

「おんや？何か光った？」

近道の公園抜けて歩いてたら、池のほとりで何か光った気が。

この池って、昔っからあるらしくて、公園の池には珍しく人工じや無いそーな。

「お宝だったりして」

んな訳無えよ、とポケットコミしつつ近付いてみる。

「ビー玉？」

にしちや綺麗だなコレ。ガラスとは思えん。

” 助けてください”

「何奴！？」

剣術齧ってるし、愛読してるのは専ら歴史・時代小説だったりす

る俺は、どーも時代錯誤な台詞を吐くクセが……。

”私の声が聞こえるんですか?!”

「……」

なんか女の子っぽいな。しかあし周りにはだーれも居ない。この声はどっから……ビー玉?

「あーあー、テストス。聞こえますかー?」

試しにビー玉に話しかけてみる。周りに誰も居ないとは言え、我ながら胡散臭過ぎるアクションなんで、無論小声である。

”ッ!き、聞こえますっ!お、お願いです、私をここから出して下さいっ!”

「ここって?このビー玉からか?」

何フツーに会話しとるんだろ俺。

あー、ゲームのやり過ぎかなー?ラノベとかも読んでるしなー。脳がもうアッチ方面なのか……。

”あっ、いえその、それは通信用の……”

「あっそ。んじゃアンタはどこにいるねん?それがまず分からんぞ。」

”へ、部屋ですが……”

天然かよっ!

「お前……バカだろ?」

アンタからお前に降格。

” ひ、酷いですっ！いきなりそんなっ！”

「だってお前、世界にどれだけ部屋があると思ってるんだ？」

” あ、それもそうですね・・・”

なんだコイツは・・・

「んで、そこはドコの部屋なんだ？」

” 私の部屋です”

「・・・おーけー。サヨウナラ。」

” あっ！ま、待つてくださいつ！ホントにそれ以上判らないんですっ！”

「あ？何故？」

” わ、私・・・ココから出られないんです・・・”

なんとっ！監禁となっ！？いや事故か？

いやいや、事故なら大まかな居場所くらい判るよな。多分。

「ケーサツに連絡するから、官姓名を名乗れ。」

” ケーサツつて何ですか？カンセーメーつて？”

「ケーサツ知らんのか？日本人だろお前？」

” いえ、私は王魔族です。ニッポンジンつて種族ではありません”

「つてお前日本語で喋ってるじゃんか？・・・オウマゾク？」

” ご存知ありませんか？”

「ご存知あるわきや無え・・・。日本人じゃ無いガイジンだとしても、ここまで流暢に会話出来るのにケーサツ知らんとか有り得ねよな？」

これはもしかして第 種接近遭遇とかじゃあるまいか？

いやそもそもビー玉で会話してる時点でアレなんだよな。俺つてもう末期かもな・・・。

” あ、あの・・・まだそこにいらつしやいますか？”

「・・・あ、ああスマン。んでお前さ。」

” はい？”

「具体的に、どーすりやそこから出られるんだ？」

” 私以外の誰かが、この部屋の扉を開けてくだされば・・・”

「外からは開けられないのか？」

” まず無理です。この結界を破れるのは発動した本人のみです”

結界と来たか・・・こりやもうカンペキにアツチ方面だな。

それを理解しちやつてる俺も俺だがな。

「その本人はもう居ないって事か？」

”・・・父は亡くなりました”

「スマン。」

” いえ・・・もう150年も前の事ですから・・・”

はい決定。こいつ人外。デムパじゃ無ければ、だが・・・ビー玉通信の時点でもうアレだしな。

「そうか・・・んでお前は、俺に来て欲しいっつーわけだな？」

” はいっ！来ていただけるとはならぬ・・・”

「どうやって行けば良い？」

” 私が召喚します！”

「結界があるんだろ？んなの弾かれねーか？」

” 結界は、異世界には作用しませんから・・・”

「あー、やつぱ異世界なのね・・・。」

” はい、それで、あの・・・その・・・”

「行ったらコツチにや戻れない、つてか。」

” あう・・・はい、そうなんです・・・呼ぶ事は出来るんですが、その・・・”

「なあお前・・・150年ひとりぼっちだったのか？」

” う・・・はい・・・ずっと一人です・・・ ”

「ちよつと考えさせてもらおう。連絡はこのビー玉持ってりや良
いのか？」

” あっ、はい！それを握って私の名前を念じてくだされば・・・ ”

「・・・お前、なんて名前？」

” あ、あああーっ！名乗りもせず、し、失礼いたしましたっ！

私はエルクレア・ミューリイ・バルクホルンと申します！”

「長げーなおい。エルクレ・・・クレアで良いか？」

” / / / あ・・・はい、そ、それで構いません / / / ”

なんか照れてるっばい気配。 かわいーじゃねーか・・・ハッ！！

「あー、クレア。つかぬ事を訊くが・・・」

” はい？ ”

「お前、スリーサイズは？」

” / / / そっ、そんなの言えませんか！ / / / ”

「教えてくれなきゃサヨナラだ。」

” そ、そんなっ！”

我ながらサイテーだな。つかスリーサイズは通じるのか。

「だつてよー、もしかしたらコツチの生活捨てて行くんだぜ？ん
で行つてみたら相手は全然タイプじゃ無かった・・・なんてイヤだ
しいっ？」

” うう・・・そ、それでは、あ・・・私の画像をお送りします
から、それで、その・・・ ”

「画像送れるのか？すぐ送りなさいっ！出来れば全裸のをっ！」

” / / / そんなのありませんっ！・・・ただその、送るのに時間
がかかります・・・ ”

そいやまだ公園だった・・・まずおうちに帰るか・・・。

五分五分

家に帰って着替えて待つこと数分。ビー玉が点滅し始めた。

「来たか！」

期待半分、失望の悪寒半分である。

ビー玉を握り締め、念じてみる。

”おゝい、クレア〜？”

”あっ……えーと、その、あの……”

「ん？」

”……お、お名前をまだ……”

「おおー！みすていく！ まいねーむいず ゆーき ほーじょー」

”ま、まいねーむいず さん……ですか？”

日本語はおくなのに英語は駄目なのかよ……自慢出来る英語でも無いが。

「あー、ユーキが名前で、ホージョーが苗字。」

”ミヨウジとはなんですか？”

「……あー、氏族の名乗り、が近いのかな。ホージョー家のユ
ーキって意味。」

”ファミリーネームの事ですね。分かりました。”

なんでここだけ英語なんだよ……わけわかんねー世界だな。

「んで早速だが、画像は？」

”え？お、送りましたけど……？……あぁっ！送信出来ませ
んでしたになつてっ！”

「あ？」

” す、すみません・・・なんか画像は送れないみたいで・・・”

「むうううう。」

” お、怒らないでください”

「いや、怒ってねーよ。悩んでるだけ。」

そいやこいつ、俺の事何にも訊かねーよな。遠慮してんのか？

「なーお前さ。俺がどんなヤツか気にならんのか？なんも訊いてこねーけどさ？」

” それは・・・気にならない訳無いです。

でも・・・ユーキさんは、全てを捨てても私の為に来てくださる・・・かも知れないんですよ？

だったら・・・来てくださるのなら、全てを受け入れるのが、私の務めでは、と・・・”

そうだなー。考えてみたら、お互い声と名前しか知らねーんだよな。

向こうが受け入れてるんだもんな。こっちも受け入れるべきだな。行つてやる、とか威張つてみても、俺だって”この世界から逃げられる”って喜んでんだもんな。

貸し借り無し。五分五分で丁度良いよな。

「堅苦しいヤツめ。」

” あう・・・だ、だって・・・”

「まー良いわ。んで、そっちには何か持つてけるのか？」

” えっ！き、来てくださるのですかっ！？”

「まーな。こっちに未練とかねーしな。」

” あ、あ、あ、ありがとうございますっ！！！”

「で、何か持っけてけるのか？」

”それは・・・何も無いです・・・”

「着のみ着のままかよ！」

”あう・・・いえ、その・・・服も・・・”

「なんだとーっ！？マツパでご到着！かいつ！」

”す、す、す、すみませんっ！”

「うーむ・・・服とか用意しとけよ。」

”そ、それは勿論ですっ！”

「あー、先に言っておくがな・・・」

”はい”

「俺はスケベだからな？」

お前が俺好みの美少女だった場合、まず確実に押し倒してエロい事するぞ？

それでも良いのか？」

”ノノか、構いませんっ！私も魔族です！ユーキさんがどんな性欲魔人でも受け切ってみせますっ！”

「性欲魔人てお前・・・。まーあれだ、お前が俺好みじゃ無ければ何もしないから。手も触れんぞ。」

”凄い落差なんですね・・・”

「おーよ。それが男ってモンよ。」

”・・・”

なんか呆れられてる気もするが、構うもんか。

こいつが残念賞だったら、別の娘探せば良いんだもんね！

「んで、いつ召還するんだ？」

”で、でも・・・ホントに良いんですか？”

「くどいぞ。こつちに未練は無い！」

”わ、分かりました・・・準備しますので少しお待ちください”
「うむ。良きに計らえ。」

確かにコツチに未練は無いけど・・・村正は惜しいなあ。師匠の形見だしなあ。

もしかしたら、って事もあるし、ダメ元で持っけてみよう。

ふと気づくと、足元が光ってる。

おー、魔法陣だよな、コレ。

” あ、あの・・・ ”

「魔法陣なら出たぞ？」

” え？良かったです。ちょっと不安だったんで・・・ ”

「ホントに大丈夫なんだろうーな？次元の迷子とかイヤ過ぎるぞ？」

” 魔法陣さえ出せれば問題無いはずです ”

「ハズ？」

” あう・・・その、実践は初めてですから・・・ ”

「成る程な。理論的には問題無い、でもやった事は無い、と。」

” はい・・・だって、声が届いたのもユークキさんが初めてなんです ”

「150年ぶりの会話だったってか？」

” はい・・・嬉しくてずっと涙が止まりませんでした・・・ ”

「顔が見えなくて残念だ。」

” 悪趣味ですっ！意地悪ですっ！ ”

「ところでさ、肝心な事訊き忘れてたんだが・・・」

” 何ですか？ ”

「お前、女だよな？」

” ノノ女ですっ！赤ちゃん産めますっ！ ”

「ま、どつちでも良いか。」

” 何ですかーっ！ ”

「何でって、お前はその部屋から出られりゃ良いんだろ？」

” そ、そうですけど・・・ ”

「なら、俺はドア開けてやれば良いだけで、あとは自由なんだよな？」

”・・・はい”

「そーゆー意味でなら、お前がどんなのでも構わないわけだ。」

”どんなの・・・”

「けどさ・・・前にも言ったけど、呼ばれて行くなら美少女に呼ばれたいんだな。男としては。」

”が、頑張りますっ!”

「いや、頑張っつてどーなるモンでも無いだろ・・・」

”いーえっ！頑張っつてユーキさんに気に入られる女になってみせますからっ!”

なんか男として凄いらっつきいな事言われた気がする・・・。

美少女だと良いな・・・フツーお約束として美少女のハズだけど、”向こうの感覚では美少女。でもこっちでは・・・”って可能性もあるしな！。

最悪人型じゃ無いかも、だし。スライムの美少女とか言われてもな？

ええい！男は諦めが肝心だ！

「あー、クレア。」

”は、はい”

「呼んでくれ。」

”っ！・・・はい!”

魔法陣の光が強くなってきたな。

なんか身体が浮いてくよーな・・・

眠いぞ・・・

出会い・・・だよな一応

目を開けると、見知らぬ天井・・・じゃ無くて。

見知らぬ、だけど誰だかは思い当たる超絶美少女のドアップが目
の前にあった。

「うわーお」

「ユーキさんっ！気が付いたんですねっ！」

「ぐふっ」

いきなり全力ハグされる俺。

しかもこれおっぱいだよな・・・やーらけー・・・至福
しかしだな、この状況だと、息出来ねーんだよ・・・。

「ええい！離せっ！」

「きやつ」

無理やり引っぺがす。

「窒息死させる気かっ?!」

「す、すみませんっ！嬉しくてつい・・・」

「俺って寝てただけなんだろう？」

「そ、そうですね・・・もう3日もお目覚めにならないので、
心配で心配で・・・」

「3日も寝てた？」

「はい、多分その、召喚時に何か負担が掛かったんだと思います
が・・・」

「原因は解らねー、と。」

「はい・・・すみません。」

「ま、仕方あるめえ。お前も初めてだったんだし。」
「そう言っていただけと・・・でもホントに良かったです・・・
このまま寝たきりだったらどうしようかと・・・。」
「あーまー、心配してくれたのはありがとな。」
「いえ、そんな・・・。」

うーむ・・・

お約束とはいえ、このレベルは反則だろー？
ルックスには文句つけよーも無え・・・。

腰までの金髪。透き通った碧眼、当然ボンキュッボン。ツルペタ
だったら萎え萎えだったがな。

おまけに仕草とか一々可愛いんだよこいつ。完敗だぜい。

「そいやお前って魔族だよな？」

「はい。正確には王魔族ですが。」

「王ってこたあ、お前魔王一族とか？」

「はい。父は魔王でした。」

「おおー！お前王女かよ！」

「それって・・・洒落ですか？」

「ち、違っ！」

何でだろ？

ぶっちゃんけ初対面なんだが、なんでこんな気安いんだ俺ら？

「ところでクレア。」

「はい？」

そこで小首を傾げるな！可愛い過ぎるんだよ！

「腹減った。」

「あつ！すぐ用意いたします！」
「うむ。」

「おー、美味そうだな！」

「お口に合えば良いんですが・・・」

「万ー俺の口に合わなくても、お前は気に病む事は無いぞ。」

「え？」

「同じ世界でも、場所によって味付けとか全然違うんだ。」

ましてや俺は異世界から来たんだぜ？

味覚が違つても不思議じゃ無えわな。」

「むー、なんか口に合わないのが前提になつてるような・・・？」

「いやな、俺の世界だと、お姫様〓殺人料理 って図式があつ

てな・・・。」

「うー・・・そんなのは、こつちでは通用しません！」

「まー、取り敢えず食うけどさ。」

・・・あー、解毒剤用意しといてくれる？」

「ひ、酷いですっ！」

膨れっ面してたクレアだが、それでも解毒剤らしきモノを用意して
てるトコが可愛いよな。

まーこいつの腕云々とかじゃ無くて、こつち、もしくは魔族には
安全な食材でも、俺には毒物ってー可能性があるわけで。

敢えて言わなかったけど、こいつもそれに気付いたっばい。意外
と頭良さそうだな。

にしてもこいつ、雰囲気は結構大人っぽいの、表情や仕草とか
が子供っぽくて、キョーレツに可愛いんだよな！。

俺もうカンペキにヤラれたかなー？

「うむ・・・美味かったぞ。」

「ホントですか?!」

「ウソは言わねーって。美味く無いのを美味いって言うっちゃうと、ずっとそれ食わなきゃならなくなるだろ。」

後から、実は美味くなかったとか言い難いからなー。」

「うふふ・・・それはそうですね。」

「つーわけで、ホントに美味かったから安心しろ。」

「はい」

食後のお茶中・・・

「そいや、150年ここから出てないんだよな？食材はどっから？」

「あ、倉庫に沢山あるんです。」

「いや、腐ったりしねーの？」

「保存の魔法が掛かっているので、問題無いんです。」

「150年もか？」

「普通は1年くらいで保存魔法は切れちゃうんですが、私が掛け直してますから。」

「魔法って便利だなー・・・。」

「使い方次第ですね。」

「ふむ。・・・あー・・・やっぱり良いや。」

「何ですか？」

「あー、良いって・・・。」

「気になりますっ！」

「・・・じゃあ訊くけど・・・お前をここに閉じ込めたのは親父さんなんだよな？何でだ？」

「・・・その事でしたか・・・」

父は、まだ幼かった私を守るうとしたんだと思います。」
「守る?・・・戦争か。」

「はい・・・人間に奇襲されて・・・魔王城も陥ちそうになって・

父は私をここへ連れて来て・・・ぐすつ。」

「ごめん、もう良いよ・・・。」

やっぱここは抱きしめてやる場面だよなー・・・あー照れるぞお
い。

ううー、こいつも抵抗しねーし・・・照れ臭過ぎるっ!

でもこいつ・・・ずーっと一人ぼっちだったんだもん・・・。

少しくらい甘えさせてやっても良いよな・・・。

「寂しかったんだな?」

「えつく・・・はい、寂しかったです、凄く寂しかったです・・・」

「よし、これからは俺がずっと一緒に居てやるからな!」

「えっ?でも・・・外へ出たら自由だからって・・・」

「自由だからな。お前の傍に居るのも俺の自由だろ?イヤか?イヤならやめるぞ。」

「ノノノ意地悪です・・・。」

「じゃ、傍に居てやるから、美味しいメシ作れよな?」

「・・・はい。ノノノ」

男の子ですから

「なあクレア。」

「何ですか？」

「いつまで引っ付いてるつもりなんだ？」

「／＼／＼とです」

「お前、結構、つーか凄げー甘えん坊なんだな……。」

「はい」

「即答かい……。」

まあ、これ程の美少女に甘えられて喜ばない男は居ないよな！。

あ、BL系の方々は喜ばんか。

しかし可愛いのを、こやつ。

頭ナデてやると嬉しそうに喉鳴らしたりしやがるし……。

……待てよ？

「お前さ、王魔族だよな？」

「そうですね？」

だから小首を傾げて上目遣いとか反則なんだよっ！

「それって、淫魔とかのチカラも使えるとか？」

「／＼／＼、使えると言うか、元々持ってます……。」

「やっぱしな……魅了チャームとか使えるんだな？」

「使えますけどっ！で、でもっ！ユーキさんには何にもしてませ
んっ！」

「ホントかあ？」

「ホントですっ！」

じいーつと、クレアの瞳を覗き込む。
見返してくるんだけど、段々顔が赤くなって来て、ついには背けられる。

「む。目を逸らすとは・・・やはり。」

「／／ちちち違いますっ！・・・み、見詰め合ってるのが恥ずかしいだけですっ！／／／」

「ホントかあ？」

「／／／ユ、ユーキさんこそ、私に魅了使ってるんじゃないんですかっ?!」

「俺が魔法なんて使えるわきゃ無えだろ？」

「・・・だ、だとしたら・・・インキュバスのチカラ持ってるんですねっ?!」

「んなモンあつたら、向こうの世界で彼女くらい出来てたわっ！」

「・・・怪しいです。きっとハーレムとか作って爛れた性活を送ってたんですね。」

「なに断定してるんだお前はっ！てかセイの字が違くなっ?!」

「ハッ！それで向こうの女に飽きて、新しい刺激を味わおうと・・・」

「待てやコラ！勝手に人をインキュ認定すんじゃ無えーっ！」

「だ、だっつっ！」

「だっつて、何だよ？」

「／／だっつて私・・・王魔族なのに・・・」

会ったばかりなのにもう・・・ユーキさんから離れたくないんだもん・・・／／／

「ぐはっ！」

”もん”とかゆーなっ！

あーもー辛抱たまらんっ！

「クレアあああつ！」
「え？あつ！きゃあああつ！」

- - - 状況開始

- - - 周辺部探索

- - - 迷宮突入

- - - 防壁突破！

- - - 最深部到達

- - - 爆破！（自爆かも）

- - - 状況終了

てれれれつてれ

ユーキは、レベルが1あがった！（何のレベルだ？）

「・・・ユーキサあん
ん？」

「ケダモノ。」

「ぐはっ！」

「でも好きい / / /」

「／／／．．．お前、可愛い過ぎっ！」
「え？きゃあああん」

．．．状況開始

．．．以下略

「鬼畜。」

「うぐっ！」

「初めての女の子に連続とか．．．悪魔。」

魔王の娘に鬼畜とか悪魔とか言われましたよ、ハイ。

「嫌いになっただか？」

「．．．好き．．．大好き　／／／」

「．．．」

「．．．」

「クレアーっ！」

「／／／きゃあああん」

．．．以下略

「．．．」

「．．．」

「まだします？」

「．．．我慢する。」

「まだ出来るんですかつ?!」

「お前だからかも。」

「//////」

「……」

「////……我慢……しなくて良いですよ?」

「……」

「……」

「……我慢して欲しく無いんだな?」

「////そ、そんな事ありませんっ!////」

「可愛いヤツめ」

「ああああん ユーキさああん 大好きいいい////」

……以下略……x3

「流石にもう良いかも……」

「……いきなり5回とか……獣欲魔神!」

「何とでも言うのが良い。余は満足じゃ。」

「////もう……」

「怒ってるのか?」

「怒ってません。呆れてるだけです。」

「なら良いや。」

「良いんですか?」

「うむ。嫌われなきゃ良い。」

「……じゃあ、私が嫌いって言ったら……」

「泣く。」

「泣くんですかっ!?!」

「とーぜんだ。」

「……じゃあ、好きって言ったら?////」

「……俺も好きだ、って言う。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……」

「……」

「／／／好きです　／／／」

「俺も好きだよ。」

「／／／あうううう……」

「どした？」

「／／／だって、だって、だってえ〜」

「だって？」

「幸せ過ぎて、どうしたら良いのか解らないんです〜／／／」

「ホントにお前は……。」

「／／／うううう／／／」

「おいで……今日はもう寝よう。」

「／／／あ……はい　」

俺って幸せなんだろうな、やっぱし。

俺の幸せは、俺の腕の中で、安らかな寝息を立てていた。

男の子ですから（後書き）

痒い・・・

背中とか猛烈にムズ痒い。

バカツプル誕生ですかね？

ユーキ君は外面クールだから、そんなに酷くはならないかな。

激しく今更

翌朝・・・なのか？何か明るいけど。

ってかさ？ここって地上なのか？

何か色々知らな過ぎる気がしてきたな。今更過ぎるけどな！

ここまでの経過は・・・

到着 爆睡3日 メシ ちよつとだけトーク 状況開始・・・
・・・うん。ダメダメだな俺。

だが敢えて言おう！

健全なる17歳男子にとって、エッチは全てに優先する！

・・・相手にも依るがな(ボソ)。

「おーい、起きろ。」

ぶにぶにのほっぺを摘んで遊んでみる。

「んにゅうううう」

美少女はズルいよね。何やっても可愛いんだからYO！

「ふぁ・・・あ・・・ゆーひひゃん？」

「起きたか？」

「ふにゅ・・・おひゃようじりやいまひゅ・・・くう・・・」
「寝るなコラ！」

こいつ寝起きは悪そうだなー。
ほっぺを両方から、ぐにぐんと引っ張ってみたり。

「あにゆうううう・・・ひはいれひゅうう><」
「うーむ・・・どこまで伸びるか実験したくなってきたな。」
「うううう〜」

涙目でやめて〜と訴えてくるんだけど、顔の下半分とのギャップが笑えるぜい。

けど可哀想だし、もうやめるか。

「うう〜・・・酷いですう。」
「すぐ起きないお前が悪い。」
「む〜、どうせならお目覚めのキスとかにしてくださいよお。」

おなじみになりつつある膨れっ面。

うむ。ここは一つ、正しい朝の迎え方を仕込んでおかねばなるまい。

「生意気な。フツーは女の子が先に起きて男を起こすモンなんだぞ！」

「ええー！そんなんですか?!」

「そうだ。」ゴハン出来てますから、早く起きてくださいね
つてのが定番なんだぞ。」

「ゴ、ゴハン作ってから起こすんですか？」

「うむ。」

「うううう〜、私、朝弱いんですう〜。」

「おーけー、じゃ、お前は嫁失格！」

「えええええ！そんなー……って、嫁？」

しまったあああ！つい口走ってしまった！

「あー、うん。俺の国では、嫁とはそうあるべきとおる。」

「／／／じゃ、じゃあ……毎朝そうやってれば、お嫁さんにしてくれるんですか？／／／」

「あー、まー、考えてやらん事も無いではない……。」

「／／／お嫁さん……ユーキさんのお嫁さん……キヤツ／／／」

だめだ、聞いてねー……。

こいつを嫁にするのは……まあアリっか、やぶさかでは無いっか……。

やっっちゃってるしな……（遠い目）。

けど！だが！しかし！

戦国時代じゃあるまいし、17で身を固めるってのはな……。ってか、今はそんなの後回しだ。

「なークレア、この家っか、穴倉っか、全部案内してくれよ。」

「／／／うふふ……はい、ア・ナ・タ」

「ぐふっ！」

え……。こ、この妄想突撃娘がつ！くるモノはあるが、今はそれ所じゃ無

デコピン1発。

「あうっ！」

「新婚ごっこはお預け！案内しなさい。」

「はあい……。」

案内&説明されたトコに依ると・・・

ここはホーライ山て山の頂上にあつた魔王城の地下らしい。
イザつて時のパニックルームみたいなモンらしいんだが、広過ぎるだろ……。

あー、城内の人員全員収容するの前提だったのかもなー。緊急避難用シエルターのほうが近いか。

部屋もやたら多いし、備蓄食糧もすげー大量だったし。

朝に感じた明るさの正体は、陽光石つて石ころだった。

なんでも、外の陽光に比例して光るらしい。原理は不明。魔力とか一切カンケー無いらしい。

……安直過ぎるネーミングだよなしかし。

つまり、昼間限定ではあるが、それなりの数を使えば、室内でも屋外と同じくらい明るく出来るわけだ。

これは便利だな。しかもエネルギー不要。

陽光に比例するから、当然夜間は使えないが、こっちの連中は基本「暗くなつたら寝る」生活サイクルらしいんで、それほど不便利や無いみたい。

やっぱお約束の中世レベルの世界なよーだ。

まーこれくらい文明レベルじゃ無いと、個人の武勇程度で大勢引っくり返したり出来ねーしな。

……あと謎だった、”なんでクレアじゃ出られない結界なのか？”を訊いてみた。

つらそうなんで訊き辛かったんだけどな。訊いておくべきだと思

ったんだ。

解りません、と言われたけど、その時の状況を聞いたら、大体想像はついた。

魔王である親父さんは、クレアを守ろうとしてた。

安全地帯であるココに入れて、自分は外で闘ってた。

すぐ外でガチバトルしてたらしいから、そこにまだ幼い娘がひよっこり出てきちゃったりしたら・・・

だから、娘が勝手に出られない結界を張った。

後で自分もココに来るつもりだったんだろ。それなら無問題なわけだし。

・・・でも来られなくなっちゃった、と。理由は考えるまでも無かる。

俺に解るくらいだ、クレアにも解ってたんだろ。

あー、もう泣きそうになってるし。

そっと抱きしめてやる。

泣き止むまで結構長かった。

激しく今更（後書き）

ユーキ君は基本女の子に優しいんですけど、ごく一部がケダモノな
んです……。

ユーキの野望

「魔法を使ってみたい。」

「よーやく泣き止んだクレアに要望してみる。」

「親父さんの事から気を逸らさせる為でもあるが、純粹にやってみたいのだ。」

「無理です。」

「即答?!」

「だって、ユーキさん魔力持って無いですから。」

「くううう・・・異世界に来たら無双チート性能だろフツー!」

「あ、でも何かチカラは持っているみたいですよ?」

「何かって何だよ?」

「わかんないです。魔力とは違うんですけど・・・。」

「うーむ・・・待てよ?」

「?」

「お前喋ってるのって、日本語じゃねーよな?」

「魔族語ですけど。」

「俺の言葉って、口の動きと合ってる?」

「合ってますよ。」

「なんで俺、魔族語喋ってるんだ?」

「さあ?あ、こっちに来たからそうなったとか?」

「いやいや、向こうに居る時からお前と話してたよな?」

「あー、そう言えばそうですね・・・。」

「お前が翻訳魔法とか使ってたわけじゃねーんだな?」

「はい。なーんにもしてません。」

「謎だ。」

「謎ですね。」

悔し過ぎる事に、俺には魔法は使えんらしいが、見てみたいとは思ったんで、クレアに実演してもらおう。

「それなら、あっちの部屋で。」

と連れて来られたのは、だだっ広い空間。

東京ドームくらいありそうだなここ。でも何にも無い。ただの洞窟。

「ここ何？」

「訓練場です。」

「成る程。」

「じゃ、やりますね？」

「おう。」

「えいっ!」

長々と詠唱とか、空中に魔法陣が浮くとか、そーゆー俺の”魔法に対するイメージ”ってのは、あっさり粉碎された。

クレアの掛け声?と同時に、100mくらい先に火柱が上がる。

同時だよ同時。

しかも火柱デケエ。

50m(目測)くらいある天井まで届く、太さ10mばかりの火炎。スゲー。

あんなの喰らったら丸焼き必至だぞ。

「あれって、上級？」

「初歩です。」

「人間でも？」

「あ、そうですね、威力は術者の魔力次第なんで、人間だと親指……くらいかな？」

「さいですか……。」

ケタ違いとかゆーレベルじゃ無えなおい……。

うん。夫婦喧嘩したら瞬殺されるな。夫婦じゃ無いけど。

「あれ？あんだだけデカイ炎なのに、こっち熱くならねーの？」

「同時に結界張りましたから。解除します？」

「いや良い。」

さすが魔王の娘。

同時に二つ発動かよ。しかもノーアクション。

「むう。やっぱり俺もやってみたいなあ。」

「……そうですね、ユーキさんのチカラが何か解りませんが、もしかしたら発動するかも知れないですし。」

「ダメ元でやってみつか……やり方おせーて。」

「簡単ですよ。イメージしてこう、えいって。」

「そんだけ？」

「私はそうですけど……父もそう言っていましたし。」

「……それって、魔王一族くらいしか通用しねーんじゃないネ？」

「と、とにかくやってみましようねっ！」

うーむ。

ダメ元とは言え、下手にトンデモなのが発動したらヤヴァいよな。無害っぽいのやってみよー。

えーと、イメージイメージ……。

「／／／きやあああっ！」

「おおうつ！ナイスっ！」

「ノノノナイスじゃありませんっ！」

「がはあっ！」

クレアの空気砲？を喰らって吹っ飛んだ。マジ痛いんですけど。

ちなみに俺がイメージしたのは、クレアの服が全部消えるビジョン。

ダメ元どころか見事に発動。

「今更恥ずかしがるなよ（キラーン）」で済む予定だったんだが、あいつの方が早かった……。

「ノノノもう……ホントにエッチなんですから……」

怒ったフリしてるけど、照れてるだけだな。可愛いヤツ。今はクレアに膝枕されつつダベっている。

そっこーで治癒魔法掛けてくれたからか、身体は何とも無い。

「でもやっぱり、ユーキさん普通じゃ無いですね。」

「どーゆー意味だコラ。」

「だって、その……私の魔法直撃したんですよ？至近距離で……」

「死んでてフツーだったってか？」

「……」

「そこで黙るんかいっ！」

「だ、だって、ビックリして恥ずかしくって、とっさに出ちゃって……ごめんなさい。」

「んーまあ、俺の方が悪かったよ。いきなりだったしな。」

「つ、次からは、その、いきなりはやめてくださいね……ノノ」

ノノ

「・・・いきなりじゃ無きゃ良いのか？」

「／／／／／／」

天国の父さん母さん・・・俺は今凄く恵まれてるかも知れないです・・・。

お約束過ぎるだろ？

「俺って魔力無いんだよな？」

「そうなんですよねー。多分その変なチカラだと思っんですけど・

・

「変言っな。」

「でも、使えるんだから良いじゃないですか！」

「アバウトだなおい。まーお前が解らんに俺に解るわけねーし。いつか！」

「ですよー！」

うん。我ながらお気楽だな。クレアもどっこいだが。

「ところで、お前ってツノとか翼とか無いのか？」

「へ？無いですよ、そんなモノ。」

「じゃー、魔族って人間と同じ姿なのか？」

「見た目はおんなじですね。」

「どーやって見分ける？」

「うーん・・・私たちは魔力量で見分けますけど、人間には見分けられないみたいです。」

「魔力って、見えるのか？お前らには。」

「見えるわけじゃ無くて、うーん・・・上手く言えないけど、感じるんです。」

「ふーん。」

”気”とか、そんな感じなのかもな。師匠の剣気とか、やっぱり凄かったしな。

「で、俺のは違う、と？」

「違いますね。上手く説明出来ないんですけど、とにかく魔力とは全然違うチカラです。」

「なのに魔法は使えるのか・・・やっぱ謎だなー。」
「ですなー。」

待てよ？

チカラって事はエネルギーみたいなモンなんだろうな。
って事はだ・・・。

燃やすモノが違うだけかも。

魔力⇨石油として、俺のチカラ⇨ロケット燃料、とか。

燃料が違うんだから燃やし方も違う。熱効率とかメンドイのは置いていて。

熱を発生させるって結果は同じわけだ。

そうか、燃料と考えれば解り易いのか。

この世界のモノは魔力用エンジン。俺のは俺専用の何か？用エンジン、って事だな。

で、出力重量比が同じなら結果も同じになる、と。

ふむふむ。

こっちの人間の燃料タンクは小さいから、大馬力エンジンは使えない。

魔族はバカでかいタンク持ってるから、それに見合った馬力が出せる、と。

おーけー、理解した。・・・多分。

「むー・・・いつまでダンマリなんですかー？」

「お？おーすまん。ちよっとチカラについて考えてたんだ。」

「何か解ったんですか？」

「いや、コレが何かはサッパリだけど、なんで俺が魔法使えたかは何となく。」

「えっ！ホントですか？教えてくださいっ！」

「あー、つまりな、チカラを燃料だと考えてみたんだ。」

「燃料ですか？」

「うん。」

説明は簡単だった。エンジン云々は流石に解らんだろーと思ったんで、湯沸しに例えてみた。

燃やすのが油だろーが薪だろーが、水がお湯になるのは一緒だろ？みたいな事言ったら、理解しやがった。

やっぱこいつ頭良いや。

いや、バカにやそもそも魔法なんて使えんか・・・。

「そいやさ、魔法属性とかってあるのか？」

「ありますよ。私は無いですけど。」

「無い・・・ってか万能なんだろ？魔族だから闇得意とか光苦手とかも無いのか？」

「無いです。そもそも魔族って呼び名も、”魔法に向けた種族”って意味ですから。」

「あー、そーなんだ・・・何か色々覆されてくな・・・。」

「？」

「あ、でもよー、淫魔とか居るんだろ？」

「彼らは・・・その・・・性魔術が得意な魔族、です。///」

「性魔術・・・。」

「あーっ！やっぱ反応したっ！」

「待て待て。興味が無いとは言わんが、今訊きたいのは種族についてだ。」

「淫魔ですか？」

「そいつらも、魔法が得意なだけなのか？」

「そうですね。それと身体能力以外人間と変わりません。」

「身体能力？」

「あ、言い忘れてました。魔族は人間より身体能力が遥かに高いんです。」

「どんぐらい？」

「えーつと・・・下級魔族でも人間の数倍・・・。」

「お前だと？」

「比べた事無いですけど・・・これぐらいです。」

足元にあつた拳大の石を、人差し指と親指だけでバリバリ砕いていくクレア様・・・。

うん。押し倒した時に反撃されてたら、ミンチ確定だったわけね俺。

いや待て俺。

初めてのアレしてる時、女の子が手加減とか無理だよなフツー？

「なあクレア。」

「はい？」

「もしかして俺、昨夜下手するとヤヴァかったんじゃ？」

「・・・」

「目を逸らすなあっ！」

「だ、だってえ・・・。」

「あー、怒って無いから。始めたのはこっちだし……（痛かったんだろっし）。」

「……ごめんなさい……私、その、あの。／＼／」

「いや、俺平気だから……って、なんで無事なんだ俺？」

「わ、解らないですけど……向こうの人はこっちだと強くなる……とか？」

「あー、多分それだなー。他に考え付かんもんなー。」

まーお約束連発してるもんな。これで当たりだべなー。

やっぱチート性能なんだなー俺。

しかしあれだぞ。

クレアの親父さんはクレアより強かったハズだよな？
それを倒すって事は……

イヤんな悪寒。

「クレア、辛い事思い出させて悪いけど……。」

「……はい。」

「親父さんと闘ってたのは、勇者か？」

「……はい。」異世界より召喚されし勇者”です。「

ビュッ。

お出かけしよう

勇者か。

俺も召喚された相手がクレアじゃ無きゃ、そっちだったかもな！

「クレア。勇者そいつについてどれくらい知ってる？」

「私も詳しくは……ただ父が、理由は判りませんが……可哀想だつて言つてたように記憶してます。」

「可哀想？……やっぱしな。」

「え？理由が判るんですか？」

「憶測に過ぎないけどな……。」

「訊いても？」

「勿論だ。」

お前、俺をこっち呼ぶ時にさ、何度も念押ししてたよな？ホントに良いのか？つて。

俺はそれで良かったから、こっちに來たわけだが……。」

「……あつ！もしかして勇者は……。」

「そつだ。恐らく強引に召喚されたんだ。……本人の意志なんか無視されてな。」

「酷い……でも、なんで父と闘う必要が？」

「魔王を倒せたら、元の世界に戻してやる、つて言われたら？」

「つ！酷すぎますっ！！」

「俺もそつ思つ。」

「そもそも、元の世界に送る術なんて無いんですよ？それを……。」

「落ち着け。あくまで憶測だ。まあ当たらずも遠からずだと思つけどな。」

「私もそつ思います。……無関係な異世界の人をそんな風に利用して……お父さまを……。」

うわぁお・・・黒い、真っ黒なオーラです！これは危険です！
こいつが本気で怒るとめっちゃ怖いです！><

「だから落ち着け！今ここで怒ってもどうにもなんねーんだし。」
「でもっ！許せませんっ！」

「落ち着けバカモン。」
「バ、バカモンって何ですかっ！」

必殺！頭ナデナデ攻撃っ！

「落ち着けっつてば・・・。」

「ノノノあう・・・はい・・・ごめんなさいノノノ」

「取り敢えず、だ。訊きたい事がまだあるんだが。」

「はい？」

「人間が召喚なんてするからには、相当大掛かりな仕掛けが要る
んじゃないか？」

「・・・そうですね。少なくとも魔法陣一つで出来るわけありま
せん。」

「と、なると・・・その仕掛けをぶっ壊すのが第一目標だな。」
「え？」

「いつまでもここで引き籠もってるわけにもいかねーだろ？」

「150年ぶりに外出ようぜ、お姫様？」

「ノノノあ・・・はいっ！」
「で、出たらまず何しよーか考えてたんだが・・・。」

「それが決まったんですね。」

「そゆ事。まず召喚装置をぶっ壊す。そうすりゃ勇者と・・・あ
・・・。」

「父の仇が討てます。」

「いや、まだ死んだと決まったわけじゃ・・・。」

「ありがとうございます……でも、もう……。」

「……」

「それに……これからは、ユーキさんが居てくれますから／＼」

「高いぞ？」

「知ってますよ」

勇者を召喚したつー下種な国は、ピラウ王国と云うらしい。

150年前の話だし、もしかしたらもう滅んでたりするかもな。

クレアの記憶によれば、魔族支配下にあったミスリル鉱山を狙ってたらしい。

自分たちじゃ魔族に勝てねーからって、見ず知らずの異世界人を使おうって根性が気に食わん。

まー当時の王とかはとつくに死んでるはずだし、直接仇討ち出来るのは至極残念だが、いまだに因業な事してるようなら、それなりの事をしてやるぜ。

まー権力は腐敗するモンだからな。多分ロクでもない国になってそうだし。

二人で一国に喧嘩売るとか、楽しそうだねー……

まあ過去には、二人で地球征服するとか言ってた猿人も居たよーだが。

取り敢えずお出かけの前に、ここに帰ってくるための魔法陣を作っておく。

作ったのはクレアだけど。

いやだって、ここって暮らすのに便利なんだよ。広いし。何でもあるし。

「さーてと。」

「準備おつけーですっ!」

「気合入ってるそこ悪いが、お出かけは明日な。」

「・・・そうでした。」

なんせ150年である。

扉の外がどーなってるのか予測が付かない。

もうじき夜になろうって時刻に出るのはマズい。

それに・・・

「おっし!風呂入ろうクレア!」

「えっ?お、お風呂ですかっ?!!」

「イヤか?」

「ノノノイ、イヤじゃ無いんですけどお・・・」

「おーし!ねっつ!」

「ノノノきゃああああノノノ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7950y/>

勇気と裕樹は違うモノなんです

2011年11月30日00時56分発行